

微妙深遠の四字は恰も是れ玄字の註脚なり然れども老子は嘗に道に玄なるのみならず亦文に玄なり讀者當に如何して之を會得すべきや物徂徠云へるあり非胸襟濶大、眼力精明者、決不能讀古書と蓋し讀む能はざるに非ずその義理の深奥を抉しその趣致の隱微を發する能はざるなり凡そ古書は語を措くこと簡短にして後世は詞を構ふること冗長なり簡短なるものは讀者の見解にてこれに幾多の言語助字を加へ始めて其義に通ずるを得べし是を以て古書の辭は毎に含蓄多く雋永にして自ら餘味あり後世の冗長にまて露骨多きに似ず老子の文の如きはその最も上乘なる者なり故に余は單に文章上より觀察して之を評するに古樸簡奥の四字を以てせんと欲す

(未完)

武士道の趣味 (下)

教授 湯 原 元 一

以上五ヶ條の外、尙細かに彙類せば、書き添ゆべきことも多からん、されども、茲には、且らく其の大綱を提ぐるのみ。

さて、今之を一括して、道德の名目、儒教の五常などに引き當て論せんに、仁か義か、さては禮智信か、彼此適切なる對照を爲さんこと覺束なし。進むも退くも、機宜を誤らぬことよけれ、時ありて、敵に脊を見せたりとて、何の妨げかあるべき。味方の勢を張るには、敵を擇ばずして切り死にするぞ、本意ならむ、雜人の手に落ちたりとて、何の恥づべきことやある。手足を毀けらると顔面を傷けらると、何程の違ひかある、彼には怒らずして、此には死を以ても争ふは、何の必要ある。軍國の事は、金穀をこそ、生命とも頼むなれ、勝手損徳のことを口にしたりとて、何の不可かある。屍を馬革に裹むは、丈夫

の志とこそ聞け、死期に臨みて、容儀の末に汲々するは、抑も何の意ぞや。大凡道徳上の判断は、其の行爲に對せずして、其の行爲の動機なる、意志に對して下すを通則となす。されば、以上五ツの場合にありても、其の意志に悪しからずば、其の行爲は、道徳上より批難すべき限りにあらず。されども、武士道は、獨り其の意志を問ふのみならず、併せて其の行爲をも問ふなり。行爲前の如くならざれば、武士の面目を損するものとなすなり。これ、予が前に武士道は、尋常の道徳學より、満足に解釋すべきことならず、審美學上の問題に属するものといへる所以なり。抑も、審美學上にて、趣味といへることは、人の感情が美と醜とに對して下す断定にて、此断定は、詩歌音楽繪畫等に見はれ、又人の言語舉動等にも現はる、武士道は、此断定の言語舉動等に見はれたるものなり。尙前の事實につき、更に細うなる説明をなさん。

凡そ人の身体の構造は、前に備はりて、後に全からず。隨ひて、衣服甲冑の飾りなど、心を用ゆるは、前面にありて、背後にあらざるが常なり。されば、背後を他人に見するは、即ち其の構造の全からざる所、心を用ゆることとらざる所を示す次第にて、其のさま見苦し。首は身体の中、尤も大切な部分なり、死後なりとて、名もなき下司下郎の手に弄ばれ、路傍に棄てられて、鴉鳶の餌とならんこと、決して快きことにはあらず、腰髻の當りに、少し許りの疵ありとて、人の目に觸るゝにもあらざれども、頭と顔とは、常に人前に露はす所なれば、鼻の當りなどに打傷のあと、又は瘡などの生じたらんは、いかに可笑き限りなるべし。容と人の蚤取り眼とやらんいふ目付にて、金錢をあさり手を顛はして、毫厘の差を計ふるは、醜きなんといふばかりなし。元を失ふことを忘れじと心懸くる武士が、利勘のことを口にせざるは、この醜態を厭ふの心のあればなるべし。死場に威容を繕ふは、首を渡すに、人を擇ぶ

と同一の心なり。前にはいひ洩らしたるが、長篠の戦に、山縣昌景が丸に中りて死するとき、采配を口にくわへ、双手に前鞍を握りて、馬上に絶命せるは、大兵の男、馬より眞倒さまに落ち、歎味方の目前にて、毛脛を露はすなどの、見苦しきさまのなからんためなるべし。かくの如く、前に擧げたる事實は、總て審美的趣味に基き、之を恥ぢとするは、此趣味の深くも之を厭へばなり。鈴屋翁が大和魂の味は、譬へを天然の美に取りたる所、限りなき味ひあり。今の世の人の如くに、美と徳とを、科學的に講究したるとあるにもあらず、かゝる眞理の、口頭に述べしれるは、流石は、古典に精通し、深く大和國民の眞相を窺ひ知れる翁のことなれば、自から相感發する所ありしなるべし。

獨乙の碩學に、ヘルバルト、ハルトマンといへるは、新派哲學者中の巨擘と稱す。此二人の説に謂へらく、美とは、萬般の事物、(意志を除く)の上に顯はれたる調和の、無條件に、何人の意にも投合するもの、而して徳とは、自他の意志の上に顯はれたる調和の、無條件に、何人の意にも投合するものなりと。二者は其の顯はるゝ場所を異にするも其の性質は、全く同一なるものなりと。かく美と徳とは、其の根底に於て、性質同じきが故に、今日と雖も、教育の上などにて、二者を混同して、美育といふべきを、徳育と視做して、怪まざることも少からず。況して、其の昔、學術の進運、尙今日の如くならざるに於ては、前にいへる如くに、従前の學者が、武士道をば、武士特有の道德と誤認せるも、穴勝深く答へべきことならざるが如し。

武士道の性質、略ぼ前述の如くば、苟も名教の維持を望むもの、誰かは之を獎勵するに躊躇すべき、然るに、世の歐米拜崇の論者は、これを以て、厚生利用の志を沮撓するものとして、痛く排斥すること、心得られぬ次第なれ。武士道を以て、厚生利用の志を沮撓するものは、恐らくは唯武士道の餘弊をの

と見て、未だ真相を窺はざるものなり。其の故如何となれば、武士道の、尤も盛なりしに當りては、勤儉貯蓄の氣風は、上下に行はれ、大小名の府庫は、充實し、海外に出師すること七年に渉るも、四民尙甚しき窮乏を感ずることなかりしは、武士道の厚生利用の途と、必しも兩立し難からざるの、一大証據にわらずや。一書に曰く、

日根備中守、朝鮮へ使するとき、黒田如水の許より、銀百枚を借り、歸國の後、如水の許へ往きしに、如水近習の士に向ひて、先刻人より贈られし鯛を三つにして、其の骨を煮て饗し候へといひしうば、吝嗇の甚しきことよと思ひ居り、やがて酒肴出で、盃を酬せし後、彼銀取り出だして返し、に、如水初より返し賜はらんと心の心にては侍らず、異國に渡らるゝによりて頼まれしかば、贈り参いらせしなりと、收めずして止みき。

又一書に曰く、

關原一戦の後、成瀬吉右衛門は、伏見にあり。其子隼人正、駿府にありけるが、折節父の許に金を贈りけり。居間の天井に釣置て、客來れば、あれ見玉へ、肴を調味せよとて、隼人が贈りたる金なり。是を見れば、美味に勝れりとぞ、かたりける。大坂冬陣和平の後、隼人が子何某、祖父の所に來りければ、此度は事故なれども、やがて事あるべし。其時よき馬をもとめよ、江戸廣しといへど、金二拾枚の馬は、さのみ多からじ、これをとて、二人の孫に、各二拾枚をあたへしとなり。

かくの如く、武士は財をしまざるにあらず、然れども、其のをしむは、財其物の爲めならで、財を以て、他の高尙なる目的を貫くの料に供せんが爲めなり、特に殖産興業は、武士道の賤む所なりなと思へるは、甚だしき皮相の觀察なり。上杉、武田、毛利等の諸豪が、第一着に金銀山の開掘に従事せるは、

歴史の上にて、著名の事實なり。彼の三名君の一人なる、備前少將の逸事として、湯淺常山が紀談中に記する所、尤も切實と覺ゆれば、左に引き出ぬ。

新太郎様、この竹を裁て枕にせよ、何村の種米はちやうにせよ、何の役は、かやうにせよといふ、御自筆に遊されたる御書の、予が曾祖父に下たされたる數十通、箱一つに有て傳へたり。今は、かやうの事は、郡代も知らざる体なり、衰へたる世のありさまにこそ。

ちやうたる適例は、固より枚擧するに遑あらざれども、大様は、右にて推知すべし。要するに武士道は、決して厚生利用の道と兩立し難きものにあらざり、但前にもいへるが如く、彼の所謂拜金宗とかいへるものゝ説の如くに、財を財其物として愛惜せず、武士の本意を貫くに必要たるが爲めに、愛惜すること。而して是れ武士道の感化を受けたる、日本國民の氣風、萬國に冠絶する所以なるべし。彼の拜金宗のいふ所の如きは、固より一時警世の語としてきくべきも、之を以て、一世を導らんと欲するは、是れぞ、正しく清潔なる日本國民にすゝめて、支那人たれといふに同じ。

稿者曰く、此篇、もご充分に武士道の真相を發揮する都盛にて起稿せしに、下篇を草するに當り、適ま臍充血にかゝり、枕頭筆を執り、忽ち完結す、恐らくば、龍頭蛇尾の嘲を免れず、幸に諒恕せられよ。

吾人學生の任務

荒木 大藏

人生の目的に就ては、古來種々の説ありて、數千萬人の頭腦を苦ましめ、未だ一定せずと雖、要するに最多數人の最大幸福を増進するに在りと云ふに歸するが如し。今此説に依れば、可成丈世界總人民を